

●最優秀賞

自己肯定感をもち、 他とよりよい共生が できる子の育成

岐阜県美濃加茂市立古井小学校 みやうち ちづこ 宮内智鶴子



I 研究の動機

本校は、児童数681名、外国人児童が2割（137名）存在する。児童数は年々増加しており、そのほとんどは外国人児童である。幸い、美濃加茂市が設置している日本語初期指導教室「のぞみ」が本校の近くにあり、4ヶ月程度その教室でひらがなや学校生活に必要な会話などを学習してから本校に入ってくる。しかし、学習における言語の理解や習得の困難さは大きく、特に中・高学年ほど大きい。そのため、「どうせ私はブラジル人だから」と、投げやりになり不適応を起こしがちな児童も出やすい。

また、本校は特別支援学級や通級教室が充実しており、特別支援教育にも恵まれた環境にある。反面、そうした支援を必要とする児童の需要が高い学校である。

そうした古井小学校の一人一人の児童たちに少しでも自己肯定感を高めて仲間や教師への信頼感を高めてやることが、安心した学校生活につながるのではないかと考え、全職員で「チーム古井」を合い言葉に実践を進めてきた。

自己肯定感を高める方法として、一人一人によさを認識させることと、学習の基礎力をつけることを中心においた。「あなたはよい子だよ」と言っても、学習が分からないために自信をなくすことはよくあるからである。

前任校は70名ほどの小規模校であったが、自

己肯定感を高めることで落ち着きや学力向上につながった。当然、小規模校と大規模校では、生かされることと生かされないことがある。特に、本校は外国籍児童に加え若手職員が多いという特色があるので、指導力の差に頼ることなく、実態に応じてできることはないかを模索してきた。校長として方針を打ち出すことで共通理解を図りながら実践を重ねてきた。

II 研究テーマ

自己肯定感をもち、他とよりよい共生ができる子の育成

III 研究の仮説

自分のよさを認識させ、かつ、基礎学力をつけてやることで自己肯定感を高めれば、自分を愛し、他者とのよりよい関係を作れるだろう

IV 研究内容

1 自己肯定感を高める取組

(1) 児童一人一人のよさを見つけ認識させる

- ①自己存在感や有用感を高めるよさみつけ
- ②外国人児童の理解とよさの広め

(2) 基礎学力をつける

- ①全職員で基礎学力をつける
- ②どの子も「できた、分かった」充実感を味わえる授業づくり
- ③今年度の子どもたちは今年度の指導者が指

導しきる

④読書で学習の基盤をつくる

⑤国際教室の充実

2 PTAの理解と協力による活動

(1) 外国人を含めた保護者の参加率の向上

(2) 保護者同士も理解を深める活動

V 実践

1 自己肯定感を高める取組

(1) 児童一人一人のよさを見つけ認識させ広める

①自己存在感や有用感を高めるよさみつけ

人間誰しも他から認められることで自信をもてる。どんな児童も「よくなりたい」という思いがあり、その気持ちを教師がどのように育てるかである。小規模校のとき、「名人賞」を全員に渡すことで、暴力的だった児童が変容していった。600人以上いる大規模校であろうと思いは同じと考え、「きらり賞」を設けて渡すことにした。

【個人に】

校長や全職員がいろいろな場で、児童の「きらり」とした光る姿を見つけたら校長名で「きらり賞」を渡すようにした。1年間のうちに必ず全員に渡している。特に、自己肯定感が乏しい児童にこそ、意識的によさを見つけて早めに渡すようにした。

渡した「きらり賞」は、家に持ち帰って保護者に見せた後、学年掲示板に貼って広めることで認め合うようにした。「きらり賞」には、周りにどんなふうによい影響を与えたかなど、行いの価値観を書くことで、自己存在感や自己有用感、所属感を高めるようにした。生徒指導主事が給食時間に放送で広めている。最初は、「きらり賞ちょうだい」とか、「これやったらきらり賞もらえる?」と、もらうことを目的にしてがんばろうとしていたが、次第に自分は認められているという安心感からか、そうした言葉は今では、ほとんど聞かれなくなってきた。叱ら

れることが多かった児童も、認められることに喜びを感じ「叱る先生」から「認めてくれる先生」という意識に次第に変わっていった。若手職員もよさみつけの大事さを理解して進んで見つけられるようになってきた。

児童同士による「よさみつけ」も行っている。帰りの会で、「今日のよいことみつけ」を発表したり、教室背面に「よいことコーナー」を位置づけたりして、仲間から認められることにも喜びを感じられるようにしている。「自分のこんなところを見てくれていた」と喜び、よりよい人間関係づくりにつながっている。

結果、地域からも「あいさつを明るくするようになった」、「〇〇君が見違えるほど変わった」という声をいただくなど笑顔で生活する児童が出てきた。今では、進んで人に喜ばれることを行う児童が増えている。

【学級や学年に】

学級や学年で協力し合った姿は「学級きらり賞」「学年きらり賞」という形で評価している。その際、「素晴らしい行いの背景には、一人一人のがんばりや仲間の絆があった」ことを強調している。さらに「学級きらり賞」を渡すときには、担任の影の努力を口頭等で伝えている。校長自らが賞状を渡したり伝えたりすることで、仲間や担任と学べる喜びを味わわせ、所属意識を高め、仲間や担任との絆が深まることをねらいとしている。

6年生は、下級生のために働くことを喜びとしてさまざまな活動に取り組んでいる。

5年生が宿泊訓練に出かけるときの6年生からのサプライズの応援エールは感動的であった。その力強い応援エールは、5年生や見送りに来ていた保護者たちが感激の涙を流すほどであった。

そのお礼に、6年生の朝早い出発の修学旅行には5年生が録音しておいた応援エールを流した。合宿や修学旅行から帰って来たときには、黑板にお帰りのメッセージを書くなど温かい心の交流がされていた。



「個人きらい賞」



学級一人一人のよいことコーナー



「学年きらい賞」



6年生からの応援エール



黒板に「おかえり」のメッセージ

4年生が市の音楽会に参加するときにも、全校で4年生に応援エールを送った。大規模校であるが、まるで一つの家族のような場面であった。

今では、「してもらった喜びを次の学年にもしてあげたい」と、これらの活動が引き継がれるようになった。職員も保護者も児童たちからもらえる温かい感動的な一コマである。

②外国人児童の理解とよさの広め

ア 外国人児童への不安な気持ちを考える授業を通して理解を深める取組

次々に多くの外国人児童が転入してくるため、日本人児童は差別なく受け入れられる。しかし、その不安な気持ちについて考えられる児童は少ない。そこで、外国人児童の気持ちを考える場を意図的に設定することで、よりよい関係作りを願った。授業は理解が始めやすい3年生にした。

授業参観等で公開することで保護者への理解にもつながっている。

〈ねらい〉

日本人児童が外国に行った疑似体験学習を通して、外国人児童の苦労を共感し今後の関わり方について考える。また、2カ国語を話せる外国人児童の素晴らしさを認識することができる。

〈展開〉

- ・通訳の先生（ポルトガル語とタガログ語）が母国語で授業を行う。
- ・日本人児童は理解ができない。理解ができた外国人児童から話した内容について聞く。
- ・日本人児童に対して、外国人児童は保護者の都合で来ていることを知らせる。また、日本に来たときのことや言葉が分からないときの思いを話させる。
- ・今後、どう関わっていくとよいかを話し合う。



【終末の感想から】

- ・言葉が分らないと本当に心配だな。
- ・分らない言葉の中でがんばっていたから、転入してくる子がいたら優しく教えてあげたいな。
- ・日本語とポルトガル語を話す〇〇君はすごい。ほくもポルトガル語で挨拶してみたい。

イ 外国人児童による自国の発信

外国人児童が2割いる本校では、外国人児童に違和感なく接することができるが、その仲間の国のことについてはほとんど知らない。そこで、昨年度の12月に国際理解集会を開き、国際教室に通っている4年生以上の外国人児童を中心に、ブラジルやフィリピンの国の文化について紹介をした。外国人児童は、親から聞き取りをしたり、本やインターネットで学んだりしたことをもとに全校の前で発表した。司会も外国人児童が行った。発表前は緊張していたが、練習の成果を発揮して堂々と紹介ができた。

ブラジルの学校には、掃除がないということを知った日本人児童からは「いいなあ」と言う声ももれていたが、「テストの結果によって落第がある」という言葉に驚きの声が全校に響いた。その後、ポルトガル語の挨拶の言葉を覚えた。日本人児童は友達国のことについて触れることができ、外国人児童の中でも、自国のことについて知らなかったことがあるなど互いにより機会となった。発表後は笑顔と安堵の表情が見られ、堂々と発表できたことは大きな自信につながった。最後には、古井小学校オリジナル絵本「みんなちがってみんななかよし」の読み聞かせを「読み聞かせクラブ」の児童が行った。給食時には、**ブラジルのコッシーニャ**を全

校で食べて、食で理解を図った。

今年度は、それぞれの国の遊びを紹介した。国によって似ている遊びや全く違う遊びがあることを知る機会となった。集会後は、縦割り活



国際理解集会①



国際理解集会②



古井小オリジナル絵本



コッシーニャを食べた給食



縦割り活動

動で実際に遊んだ。この集会に、市連合PTA参観を仕組んだことで、本校や周辺学校の保護者の理解につなげることができた。

(2) 基礎学力をつける

算数は答えが一つであり、「分かった、できた」感を味わいやすい教科である。

特に外国人児童には、言葉が難しい国語と違って答えが明確なので、学習意欲をもちやすく、自信を抱きやすい。前任校のように70名ほどの学校のときも困り感をもつ児童は必ず学級に一人か二人いた。そうした児童をときには取り出して、できる楽しさのある算数の指導をしたことで、他の教科にもよい影響を与えることができた。結果、大きな自信を得させて全体的な学力向上につながった。

それらの実践をふまえつつ、現任校の実態に応じて、力をつけ自信をもたせる方法を探りながら実践を重ねてきた。

①全職員で基礎学力をつける

ア 全員九九が言えるようにする

九九を覚えていないために算数嫌いが多い実態がある。そこで基礎学力をつける最初の一環として、3年生以上で九九が言えない児童を洗い出し、担任以外のフリーの職員の力を借りて、全員が九九が言えるようにした。特に、外国人児童については、その保護者を頼ることは難しいので、休み時間を利用して行った結果、九九を唱えて問題に取り組む児童が増えた。2年生は、担任から合格をもらった後、校長室で最終試験を受け、合格した子は金メダルを与えて励みにさせた。



九九を合格し金メダルをもらう児童

イ 補充教室の開催

夏期長期休暇をいかに過ごすかは、2学期の学習に影響をする。そこで、夏休みの後半に学習教室を開いて復習等を行い、2学期に自信をつけて登校できるようにした。また、学期の終わりには、補充時間を設定している。そこには、担任だけでなく、全職員が関わって少人数で指導できる体制をとった。

②どの子ども「分かった、できた」充実感を味わえる授業づくり

算数の指導上、共通して大事にさせていることは、2点ある。

1点目は、どの子ども、その時間内に分かりきらせることである。終末の10分から15分は見届けの時間として、一人一人のノートに丸を付けて回る○付け法によって、全員に分かりきらせることを徹底している。どうしても、理解できない児童には、休み時間等を利用してでも補充をするようになった。授業時間内で分からなかった児童の中から、「もっとやりたい」という声があがるようになるなど、教師の意識の高まりと同時に児童の意識も高まってきた。

2点目は、必ず理解させた上で、家庭学習の課題を出すことである。進まなかった授業の補充や分からないまま宿題を出すことは避けることを徹底させている。

また、同じ課題の宿題を出すのではなく、ときには、児童に応じた課題を出すように指導している。同じ課題では、10分でできる子もいれば、2時間近くかかる子もいる。そうした児童は、保護者に家で叱られたり、答えを写したりするなどして宿題を課した意味がなくなる場合がある。そこで、長時間かかりがちな児童には、どこまでなら確実にやってこられるかを自己決定させて、自分のためになるようにさせている。「それでは不平等にならないか」と考える教師もいたが、「学習を嫌いにさせるより、自信をもたせること」をねらいとして実践してもらった。結果、自己決定した量よりも多くやってくる児童が出てきた。

担任一人で、支援を要する児童すべてに対応することには限界がある。そこで、仲間と助け合い、教え合う学習を取り入れることで、外国人児童や支援が必要な児童も理解できないかを研究し実践した。

ア 主体的な学び合いにさせるための「共同学習」による授業の取り入れ

【実践例：2年生「くりさがりのある引き算」

3/7

〈ねらい〉：102-65の計算のように、10の位から繰り下げることができない3位数-2位数の筆算を、仲間と助け合いながら筆算で計算ができるようにする。

〈展開〉

- ・導入で「こびお君」を登場させて、「こびお君は、こう考えました」と、児童が間違いやすい例を出す。提示することで解決意欲をもたせる。
- ・（共同学習）3～4人のグループでホワイトボード上で磁石玉を操作しながら筆算の仕方を導き出す。
- ・グループで考えたことを発表後、全員で筆算の仕方について確認をする。
- ・チェック問題や練習問題をして全員ができたかの見届けをする。

$$\begin{array}{r} 102 \\ - 65 \\ \hline \uparrow 7 \\ \text{あれ??} \end{array}$$

〈成果〉

- 「こびお君」の解き方は、正しいか、正しくないか、自分の考えを明らかにしたことで問題解決意欲がわいた。
- 少人数グループで話し合うことで安心して学習に取り組めた。言葉の理解が不十分な外国人児童や支援を要する児童は、仲間がやっていることを目で確認できることで理解につながった。

グループ学習の段階で、理解ができた児童にはノートに分かったことを書かせ、書くことが不十分な外国人児童には、筆算をさせる



ことで本時の学びをアウトプットさせた。児童の実態に応じた柔軟な指導をすることでそれぞれの児童の自信につながった。

- 共同学習後の全体確認の場面では、グループで発表させた。グループ発表をすることで、「言葉を発表する人」、「板書のおはじきを操作する人」といった役割が明確になり、外国人児童も安心して発表に参加できていた。
- 練習問題も15分確保されたことで、全員が理解でき、授業終了後は「楽しかった」という児童の満足気な言葉が多くあった。

イ 少人数指導を生かしたきめ細かな授業

加配教員の2名を生かして、4年生以上は、じっくりコースとチャレンジコースに分けている。増加傾向の外国人児童や支援を要する児童に、通常学級でどう主体的に学ばせるかを常に研究している。

支援を要する児童はじっくりコースになりがちであるが、コースは自分で選択させ、途中での変更も可能にすることで安心感をもたせている。

【実践例：5年生】

じっくりコースは、教えることと考えさせることを明確にもち、理解したことが定着するような授業の仕組みにしている。それに対しチャレンジコースは、いろいろな考え方をさせる



ペア交流

ようにしている。すべての単元や時間ではないが、基本の考え方としている。

また、学習内容によっては、ペア交流を位置づけて、自分の考えをアウトプットする場面の設定も行った。ペア交流のあり方として、授業前半に行う場合は、自分の考えに自信をもたせたり、相手の考えを知ったりすることを中心におき、後半部分で活用する場合には、本時に理解したことを定着する場としている。

そのペア交流の際には、相手の考えを聞くだけでなく、互いに質問を入れさせることもした。疑問に思ったことだけでなく、自分が理解していることでも、あえて質問をさせるようにした。知っているつもりの内容もアウトプットさせることで、考えがより明確になって定着につなげることができた。

ウ 見通しと出口を明らかにした授業

安心して、かつ主体的な学びになるように「1時間の見通し」を板書して提示するようにしている。外国人児童や、支援を要する児童は、教師の指示したことに對して受け身になりがちである。そこで、少しでも主体的にさせるために、1時間の活動の流れや、「今日は、2の段の九九が言えるようになろう」など出口を明確にするようにした。これは、どの教科でも行うようにしている。

エ 3分前プリント学習の実施

基礎学力の定着には、復習が大切である。学習中の単元は理解しても、以前の単元内容は忘れてしまっていることがよくある。そこで、高学年では、3～5問程度の3分前プリント学習を取り入れさせた。

例えば、小数のかけ算、わり算の学習をして

いるときは、小数の足し算、引き算の問題を3分前学習で取り入れるようにするのである。なぜなら、小数点の位置の付け方において、足し算引き算の場合と乗除計算で、児童はよく混乱するからである。間違いが多いところは継続することで整理できるようにした。答え合わせも自分で行わせることで、すぐに解決できるようにしている。最初は、見本として校長が作成したが、その後は担当者に任せた。毎時間継続することで、定着が図られ、計算が苦手だった児童も自信をつけることができた。結果、単元テストや全国学力状況調査でも基本問題は力がついた。

オ 1時間の充実感をもてる国語の授業のあり方

国語でも、算数のように1時間の学びが明確になる方法はないかを考えていた。そこで、読みのステップ段階表を数値化してみた。授業の始めの読みと、1時間後の読みのステップに丸を付けさせたと、支援を要する児童にも満足感が得られた。更に研究を重ねていきたい。

終わったら自分で答え合わせしよう。
わからなかったら先生に聞いて必ず分かるようにしておきましょう。
答えを覚えてもいいですが、自分のためになる方法を考えて行動しましょう。

① $1.4 + 9.26$ 10.66
② 3の倍数を6こ書きましょう 3, 6, 9, 12, 15
③ 8の約数

--	--	--	--	--

 1, 2, 4, 8
④ 12の約数

--	--	--	--	--

 1, 2, 3, 4, 6, 12
⑤ 8と12の公約数 () 1, 2, 4, 8
⑥ 8と12の公約数12の最大公約数 () 8

読める数は
一つでもはか
ら

3分前プリント学習

第1次

読みのステップ	読みの内容	読みの方法	読みの結果
1	全文を音読する	声を出して読む	全文を正確に読む
2	全文を黙読する	目だけで読む	全文の内容を理解する
3	全文を音読する	声を出して読む	全文を正確に読む
4	全文を黙読する	目だけで読む	全文の内容を理解する
5	全文を音読する	声を出して読む	全文を正確に読む
6	全文を黙読する	目だけで読む	全文の内容を理解する
7	全文を音読する	声を出して読む	全文を正確に読む
8	全文を黙読する	目だけで読む	全文の内容を理解する
9	全文を音読する	声を出して読む	全文を正確に読む
10	全文を黙読する	目だけで読む	全文の内容を理解する

数値化した読みのステップ段階表

③今年度の子どもたちは今年度の指導者が指導しきる

毎年学級編成がある本校では、担任と児童の出会いが概ね1年である。この出会いを大切に、児童たちの成長に少しでもよい影響を与える教師であることを願っている。

生活面では、さまざまな行事等で仲間同士の絆を深め、互いに成長し合い、よりよい思い出をつくっていく。学習においても、単年度の成果をきちんと教師が確認をして責任や使命感をもつことが大事である。学習は、1年1年の積み重ねで成り立つため1年間の責任は大きい。

「今年度の子どもたちは、今年度の教師が責任をもって指導しきる。次の学年が少しでも困らないようにして次の学年に送る」を合い言葉にしている。

ア 1年間の成果と課題の明確化

全学年で、算数と国語の指導の成果を確かめる学力テストを実施するようにした。弱いところを補充するようにして、「少しでも次の学年で困らないようにして、次学年に送れるようにする」ことがねらいである。

2月中には結果が出るようにテストの実施日を設定し、結果を各学級・各学年で出して、指導の成果を振り返るようにしている。課題として見つかったところは、3月に補充の時間を設定し、担任以外の教師も一緒になって複数の教師で指導にあたり、一人一人に少しでも力をつけるようにしている。

イ 単元ごとの確認テストの扱い方

単元終了後は、確認テストとテスト直しは必ず行う。苦手な児童ほど1時間のうちに間違い直しが終わらなかったり、意欲をもって直しができなかったりする場合がある。そこで、テスト直しに時間をかけるより、自信をつけた状態で受けさせるように働きかけた。「テスト後に良くない点ももらって、やる気がない状態で直しをさせるより、テスト前にしっかりと復習をさせて、自信をもたせてから受けさせましょう。結果が出れば、子どもたちは、間違い直しも意

欲的になり、何より教科をだんだん好きになっていきます」を訴え続けた。「それでは、通知表に差がつかなくなるのではないですか」と不安がった教師がいたが、「私たちの仕事は、子どもたちに力をつけることで、成績をつけることが目的ではありません。全員が百点をとったり、全員が二重丸になったりすればいいのです。それこそ教師の指導力ではないでしょうか」と伝えてきた。

実際に結果が出ると、児童たちの喜びや自信はもちろん、教師の喜びや指導力の自信にもつながるようになっていった。ときには、それでも全体的によくはない結果が出ると、「教えただけなあ。何が悪かったのでしょうか」など自分を振り返る場面が出るなど、「子どもの姿は教師の姿」と思える教師像がその言葉には表れていた。

④読書で学習の基盤をつくる

読書と学力には相関関係があることは知られている。前任校でも読書の様々な取組をすることで児童は落ち着き学力もついた。

ア 外国本の展示と図鑑の貸し出し

外国人児童は、日本語が立ち並ぶ本を読むことは得意ではない。そこで、少しでも本に興味をもたせるために、外国語の本の展示の他に、図鑑等を貸し出しできるようにした。理由としては、図鑑は絵が豊富であり、絵や写真は楽しんで見ることができるからである。絵や写真に興味をわくと次第に文字の必要性に気づいて自ら読むようになると考えたからである。「くらべる図鑑」や「ポプラディア」など、興味がわ



く本を多数購入したところ、たちまち本を借りる児童が増加した。

外国人児童の貸し出しもずいぶん増え、図鑑を広げて説明してくれたり、読めないひらがなや漢字を国際教室等で聞いたりする児童も出てきた。

イ 「楽しむ読書」と「考える読書」の図書館経営

読書は、情操面と学力面を育成できる。そこで、図書館経営として情操を高める「楽しむ読書」と学力を高める「考える読書」を重点とした。

【楽しむ読書】

「楽しむ読書」は、全職員やPTA、児童会による読み聞かせなどを生かして、読書の楽しさに触れる機会を増やしている。

【考える読書 集団読書の設定】

読書をしたからといって、学力はすぐにはつかない。やはり意図的な読書をすることが大事である。そこで、朝活動の時間内に読み切れる「短編の本」を学級全員で読む「集団読書」を取り入れている。心に感じた箇所には付箋を貼ったり、その後、感想交流を行ったりしている。交流では、気楽に話し合えることを大切にしている。感想交流を通して物の考え方に広がりや深まりが次第に見られるようになってきた。

外国人児童についても、多様な言葉を知る機会となったり、読書に親しんでいくことができたようにになった。高学年では、主題に迫った感想交流もするようになってきた。

【子ども新聞の活用】

子ども新聞を5・6年生のクラスと図書室に置いた。ねらいとしては、自分のことを中心に考えがちな児童に、世の中の事に関心をもたせたり、考えさせたりすることで、広く国際理解につながらないかと考えたからである。5年生では、国語科の「新聞を読む」の単元から、自分で関心をもった記事について感想を書かせる活動をしている。給食時には放送委員会の児童が「今日のニュース」と題して記事を紹介し、



読み聞かせ



集団読書



集団読書後の感想交流



新聞記事からの感想



他学年にも関心をもたせるようにした。活用することで、世の中に目を向けられる児童が増加し、自分の体験と結びつけて考えられる児童が出てきた。また、文章を読むことが苦手な児童の中にも、身近な記事を見つけて進んで読む姿があった。

⑤国際教室の充実

日本語が不十分な児童への日本語初期指導が中心であるが、個によっては算数を通して日本語を学ばせるという考えで、算数の指導も行うようにした。算数は答えがはっきりしているのので、自信が得られやすくなった。

2 PTAの理解と協力による活動

(1) 外国人を含めた保護者の参加率の向上

参観日等における外国人保護者会の出席率が低い状態であった。外国人保護者会を設けて学校等の説明や相談を行ってきたが、必ずしも参加率は高くなかった。そこで、PTA役員と相談をし、今年度より4月の最初の授業参観及びPTA総会を親子登下校にした。夫婦で参加する家族も多数あり、会員数を超える過去最高の参加率となった。

日本語の理解が不十分な外国人保護者には、外国人保護者会を設けて校長の学校経営方針やPTA会長によるPTA活動について説明を行っている。個人懇談等でも通訳をつけて理解を得るようにして、地道な活動を継続することで学校やPTA活動の理解を深めている。

(2) 保護者同士も理解を深める活動

児童同士は国籍に関係なく仲良くできるが、保護者同士はまだそこまでいかない。昨年度までは、PTA活動として国際交流委員会による盆おどり大会があった。外国人児童や保護者に日本の行事を知ってもらおうねらいだが、参加は決して多くはなかった。

そこで今年度は、「ブラジル文化を親子で知ることによって保護者同士も、もっと仲良くなろう」という目的のもと「国際交流フェスタ」を開催

した。若いブラジル籍の母親が国際交流委員会の委員長になり、役員たちの大きな協力のもとで実施された。親子でブラジルの食べ物を食べたり、ゲームをしたりして、ブラジルの文化に触れ、楽しむことができた。1回目ということで200名の人数制限をかけたが、外国人保護者と日本人保護者が子どもたちのように笑顔で会話をする場面があり、参加者は両者の距離を縮めることができた。外国の方々はネットワークが優れているので、こうした活動が口コミで広がり、今後、転入生の保護者にも学校への理解が深まっていくことを願っている。



国際教室



PTA総会



外国人保護者会



Ⅵ 成果と課題

○「きらり賞」やよいことみつけ等でよさを価値づけてきたことで、積極的に人のために働いたり動いたりする姿が増えた。何より、人が喜んでくれることを自分の喜びに感じることができるようになった。

特に、今年度の保健委員会では、歯磨きを広めるための台本作りから企画運営までのほとんどを自分たちで創意工夫するなど、自主的な活動をする児童が出てきた。

○国際理解集会での自信は大きく、外国人児童とのトラブルが減少した。司会をした児童は「ぼくの自慢は悪口を言うことと、けんかをする」と言っていたが学級のよきリーダー的存在に変容した。

○自分のよくなったところを自覚できる児童が増え、国籍に関係なく、投げやりがちだった児童たちが、明るく積極的に仲間と関われるようになるなど大きく変容してきた。全国学力テストの質問紙にある「自分にはよいところがあると思いますか」という問いに対して、

自信をもって「はい」と答えた児童の数が年々増加した。岐阜県学習状況調査でも「自分にはよいところがあると思う」が県平均をかなり上回った。

○仲間を大切にする意識が高まり、全校集会でも早く静かに整然と集合できるなど、落ち着いた雰囲気のある学校になった。各種訪問でも「外国人児童が自然に溶け込んで学習している」「落ち着いた学習姿勢である」等のご意見をいただくようになった。掃除も黙って行えたり、靴もいつもそろえられていたりなど、古井小学校の自慢が増えている。

○「今年度の児童は今年度の教師が責任をもって指導しきる」「困っている子をつくらない指導」を合い言葉に全職員で努力をしてきた結果、教師も指導に対する使命感が高まった。結果「分からないこと」を恥ずかしがらずに質問して教師や仲間に教えてもらおうとする雰囲気が出てきた。全国学習状況調査では、2年連続好結果を得た。学校独自の全学年実施の全国学力テストでも、好成績を残せるようになってきた。何よりも学習を楽しめる児童が増加した。

○図鑑の貸し出しにより外国人児童のみならず、



進んで読書をする児童が増加した。休み時間に図書館を利用する児童が増え、平成28年度には岐阜県可茂地区図書館教育賞最優秀賞を受賞した。(H26年21冊 H27年51冊 H28年90冊)

○地域の見守り隊の方々から「児童があいさつをよくするようになった」「○○君はすごく変わった。顔が笑顔で優しくなった」などのうれしい言葉を多くいただくようになった。

○ただの「外国人の仲間」という見方から「がんばっている子。2カ国語話せるすごい子」といった見方が出てきた。

●児童の育成にあたっては、保護者の協力が欠かせない。しかし、子育てに悩んでいる家庭が多い。関係機関と一層の連携を図りながら、楽しみながら子育てができる支援を考えていきたい。

●時期を選ばずに転入してくる外国人児童に対して、よりよい学習支援のあり方を今後も研究していく必要がある。

●PTAと連携を図ることで保護者の理解を深めていきたい。



笑顔でハイタッチ

大きな支えがあることを記述しておきたい。

〈参考文献〉

愛知教育大学 志水廣氏 問題解決型授業を促進する○付け法・意味づけ提唱法

Ⅶ 終わりに

外国人児童も含めどの児童にも自己肯定感を高めたいという思いで取り組んできた。ベテラン、若手に関係なく、どの職員も児童一人一人の実態や心に寄り添い、成長を念頭に、地道に、かつ確実に努力してきた。児童の対応で困ったときはすぐに職員同士が助け合うなど全職員がチームとなって取り組んできたからこそ目に見える変容や結果が得られてきた。また、その陰にはPTAや市教育委員会、関係機関の皆様の